



同志社カレッジ・ソング 解説

同志社女子大学名誉教授

こたま さねひで
児玉 実英

同志社カレッジ・ソングは、新島精神を源流とする「同志社精神」を、力強く、また典雅に、うたいあげています。実は、その英語の歌詩には、ウィリアム・M・ヴォーリズがこれを書いた1908年頃の英米の詩人たちがよく心得ていた伝統的な詩語が使われていたり、修辭法がふまえられたりしているのです。また当時、英語文化圏の多くの人たちが手にしていた英訳聖書の影響も見られます。カレッジ・ソングの歌詩の文法的な説明とともに、英語の歴史や、英米詩の流れの中で見るといふ視点などもおりまぜて、解説してみたいと思います。

第1連の解説

最初の4行から読んでみましょう。

One purpose, Doshisha, thy name

Doth signify one lofty aim;

To train thy sons in heart and hand

To live for God and Native Land.

1行目の Doshisha は、呼びかけで、「同志社よ」といっています。次にくる thy name は、「この文章の主語です。『汝の名は』という意味です。thy は代名詞 your の古い形。16世紀ぐらいの英語の歴史の中で、よく使われてきました。ここでも、古風で典雅な雰囲気や詩全体に漂わせるように使われています。いわゆる詩語 (poetic diction) として用いられています。同時に thy name は、「Hallowed be thy name” (AV, Matt, 6, ix 欽定訳聖書)「御名があがめられますように」(マタイによる福音書6章9節)という有名な主の祈りの一節を想起させます。それによってキリスト教的な含みを感じさせています。

動詞は Doth signify です。Doth は、助動詞 do の3人

Doshisha College Song Words by W.M. Vories Music by Carl Wilhelm 1. One purpose, Doshisha, thy name Doth signify one lofty aim; To train thy sons in heart and hand To live for God and Native Land. Dear Alma Mater, sons of thine Shall be as branches to the vine; Tho' through the world we wander far and wide, Still in our hearts thy precepts shall abide! 2. We came to Doshisha to find The broader culture of the mind; We tarried here to learn anew The value of a purpose true; Dear Alma Mater, ours the part To face the future staunch of heart, Since thou hast taught us with high aim to stand For God, for Doshisha, and Native Land! 3. When war clouds bring their dark alarms, Ten thousand patriots rush to arms, But we would through long years of peace Our Country's name and fame increase. Dear Alma Mater, sons of thine Will hold their lives a trust divine. Steadfast in purpose we will ever stand For God, for Doshisha, and Native Land! 4. Still broader than our land of birth, We've learned the oneness of our Earth; Still higher than self-love we find The love and service of mankind. Dear Alma Mater, sons of thine Would strive to live the life divine; That we may with increasing years have stood For God, for Doshisha, and Brotherhood!	同志社 校歌 (児玉 実英 訳) 1. 同志社よ、その名は一つの目的を意味する その学徒の精神的、肉体的に 神のため、祖国のため 生きんという、一つの崇高な目的を。 親愛なる母校よ。同志社の学徒は ぶどうの枝のごとく連りゆくであろう。 たとえ世界くまなく、広くはるかに われらさまようとも、汝の教訓は われわれの心に、とわに生き続けるであろう。 2. われわれが同志社にきたのは、 心のより広き糧を求めてだ。 われわれは真の目的の価値を 新たなる意味において学ぼうとし ここにとどまった。 親愛なる母校よ。われわれのつとめは 堅い心をもって未来に立ち向かうことである。 なぜなら同志社は、 神のため、同志社のため、また祖国のために 高い目的をもって、立てよと、 われわれに教えてきたからである。 3. 戦雲がその険悪な動向を示すとき、 いく千の愛国者は武器をもってはせ参ずる。 しかしわれわれは 久しきにわたる平和の年月のうちに 祖国の名と名声を いやましにまじたいと思う。 親愛なる母校よ。その学徒は その生涯をととし、 神を信頼し続けて、歩むことであろう。 確固不動の目的をもってわれわれは たえず神のため、同志社のため、 また祖国のために立たんとするものである。 4. われわれが生まれた国よりも、 さらに広い世界といえども、 それは、一つであることを われわれは学んだ。 自己愛よりもいや高き人類愛と 奉仕の精神を、われわれは会得する。 親愛なる母校よ。その学徒は 聖なる生涯を送らんがため 励もうとしている。 重ねゆく年とともに 神のため、同志社のため、同胞のため かえりみて悔いなからんがために。
--	--

称単数現在形 *does* の古い形です。ここでは、強調語として使われています。「意味するのである」といったところでしょうか。

目的語は、冒頭の *One purpose* 「ひとつの目的、志」です。とくに強調するために、語順を変え、弱強調 (*iambic*) のリズムもこわし、目的語を文頭にもってきています。英詩でよく使う手法です。ここでは短くいい尽くせていないので、改めて2行目で *one lofty aim* 「ひとつの高尚な目的」といいなおして補い、それを動詞の後の所定の位置に置いています。

One purpose には、もうひとつ特別な意味が含まれています。「同志社の性格は、その名のワンパーパスです。そこに詩想の根拠をおいて書き続けました」(『同志社タイムス』一九二五年二月二八日、二ページ) というヴォーリズのことばから浮かび上がってくるのですが、彼の理解では、同志社の基本的性格は、「その名」のとおり「同じ志」であり、それがワンパーパスに含まれた意味だということです。つまり、ワンパーパスには、確固不動の一つの目的に向かって、決意をもって立ち向かう同じ志の人たちの姿勢が含まれている、ということです。この作詩者の意図は、尊重されてよいと思われます。

(付記)

なお *aim* は *purpose* と同じように「目的」という意味ですが、距離感が違います。「ねらい」を定めて達成可能なほど近いところにある「目標」といったニュアンスです。だから *lofty aim* は、パラドックス的表現です。「高尚な」「目標」は一見矛盾しているようにみえるけれども、実は一つの真理をさし示している、という表現です。高尚な目的は遠くにあるように見えるが、実は近い所にあるといったニュアンスでしょう。ただ、このようなニュアンスや、先ほどのような意味の重層は、残念ながら、翻訳は困難というより、不可能です。

2行目の終わりのセミコロンは、現在のスタイルシートでは、コロンをを用いるところでしょう。「すなわち」といった意味で使われています。ですから、3行目から4行目にかけて、「*to train*」以下は、高尚なる目的とはなにか、すなわち、と次にさらに具体的に書いていくわけです。

train は動詞で「訓練する、育成する、はぐくむ」。「*to train the to*」は、スクール・グラマーという不定詞で、ここでは「～すること」といいかえればよいでしょう。

sons は *son* (「息子」あるいは「息子のような関係の者」) の複数形ですが、複数形の *sons* は、しばしば男女を問わ

ず「子どもたち」、「子孫」を指します。例えば、the sons of Abraham といえど、「アブラハムの子孫」です。ここでは、thy sons であり、thy は「同志社の」の意味ですから、thy sons は当然「同志社で学んでいる、あるいは、学んだ人たち」、つまり男も女も含めて「同志社の生徒たち」を指すといつてよいでしょう。

(付記)

1980年代から90年代にかけて、sons には女性が含まれないから、sons をやめて、かわりに heirs (相続人) に変更したらよい、という主張がありました。しかし、以上のようなわけで、その必要はありません。逆に heirs には、heirness という女性形があり、heir は基本的に男性を想定していることばと考えられていますから、問題の解決策としては不適切と思われます。

in heart and hand は「心も手も」ですが、「精神的にも肉体的にも」「心もからだも、全身全霊」の意ととった方がよいでしょう。hand は通常「腕」ではなく手首から先の「手」ですが、西洋ではしばしば hand は修辭的に使われます。ここでは、「一部でもって全体を表わす」というシネクドキー synecdoche として使われている、と見てよいでしょう。したがって、手は「肉体」を意味してい

ます。実はそういう表現方法は、日本でも「提喻法」といわれていて、日常的にも使われています。たとえば、自動車のことをクルマというのが、それにあたります。なお、ヴォーリズがアメリカで主事をつとめていた Y M C A、近江八幡に設立した日本の Y M C A の逆三角形の略章は、spirit, mind, body をさします。ここで body とせず hand とした今ひとつの理由は、次行の Land と韻をあわすため、と思われまふ。しかし、ここで見落としてはいけないのは、hand には、もう一つ、別の意味が内包されているということ。それは、「技術」とか「技芸」といった含みです。

4 行目 To live の to は、先ほどもありました不定詞ですが、ここでは目的をあらわすとり、to live は「生きるため、生きるように」と。そして for God and Native Land 「神のため、祖国のため」と続きます。大文字の G で始まる God は、いうまでもなくキリスト教の神をさします。

Native Land 「祖国」は、即「日本」ととってもよいと思う人もあると思いますが、作詩者ヴォーリズの意図としては、もっと広く、普遍的に、世界の国々の人にとっての祖国を含めたもの、というニュアンスで使っていたと思

われます。その理由は、ひとつには、19世紀の欧米では、ネオプラトニズムの思想が底流にあり、ヴォーリスもその流れの中にあつた、と思われるからです。その証拠に、頭文字をNとIという大文字を使っていますが、それはネオプラトニズムの慣例にならって、イデアとしての祖国という意味を示すためです。つまり、具体的な個々の祖国ではなく、これは観念としての祖国であることを示そうとしているのでしょう。でも、もうひとつの大切なことは、ヴォーリスが当時日本だけでなく欧米各国において「祖国」ということが国粹主義的傾向をはらみ始め、それが排外的で危険な思想につながると見ていたことでしょう。彼は国家主義とかかわりのない純粋な姿の「祖国」を思い描いていたと思われます。それは新島精神とつながるものです。ここまでの部分の大意は、散文化的な訳ですが次のようになります。

同志社よ、その名はひとつの目的を意味しているのである。

その学徒を、精神的、身体的に導き

神のため祖国のために生きていくように願うという

ひとつの崇高な目的を。

次の4行の解説に移ります。

Dear Alma Mater, sons of thine

Shall be as branches to the vine;

Tho' through the world we wander far and wide,

Still in our hearts thy precepts shall abide!

Dear Alma Mater は「親愛なる母校よ」という呼びかけです。もともと alma (アルマ) はラテン語で almus (アルムス) という形容詞の女性形。意味は「養育してくれた、やさしい、親切的な」。mater (マールテル) もラテン語で「母」したがってアルマ・マター (英語よみ) は「養育してくれた母」、転じて「母校」。

sons of thine の thine [ðæn] は thou 「汝」の所有格、つまり yours の古い形。いくつかの意味があります。ひとつは「汝のもの」。もうひとつは thy と同じ「汝」ですが、次にくることが母音で始まるときに使います。ここでは of をこまかい of thine で、雅語的に thy と同じ「汝」の意。つまり「同志社の」です。似ているようないい方ですが father of thine といえば、「汝の父」の意です。sons は「学生、生徒たち、学徒たち」。shall be 「(きっと) なるであろう」。語り手の強い願望、というより決意がこめられた表現です。

as branches to the vine「ぶどうの枝がその幹につながるように」。5行目から6行目の大意は、「親愛なる母校よ、汝の生徒はぶどうの枝のように母校につながりゆき、豊かな実を結んでゆくことだろう」。このぶどうの枝の比喩は、有名な聖書のことばが下敷きになっています。

I am the vine, ye are the branches. (AV, John, 15, v)

わたしはぶどうの木、あなたがたは、その枝である。(ヨハネによる福音書15章5節)

このことばの前後の文脈をたどると、ぶどうの枝がその幹につながっていれば、その枝には豊かにぶどうが実る。そのように人々もキリストにつながっていれば豊かな生をえられているのです。翻訳では、そのような二重うつしは残念ながら、うまく移しだせません。

(付記一)

聖書を含め古典などにたいし、暗に言及して意味の層をふくらませる手法は、西洋修辞法でアリュージョン allusion (引喩) といえます。先ほどの thy name も Hallowed be thy name へのアリュージョンと見てよいでしょう。ちなみに、日本文学にもこれに似た技法が

あります。短歌の「本歌どり」は、この一種です。

(付記二)

この2行の韻のふみかたは、注目に値します。sons of thine と vine と韻をあわせていますが、意味の上でつながりのあることばで韻をふんでいくのは、一種の超絶技法です。押韻された2つのことばを並べるだけでなく一つのイメージを浮かび上がらせることができるからです。第2連の anew と true。第3連の alarms と arms, peace と increase, name と fame など、押韻で有名なアレクサンダー・ポープには及ばないとしても、かなり高度な技術を意識して書いていると思われます。しかしヴォーリスのすぐれているところは、その技術をあまり目立たないように、run-on lines—詩の意味や構文が行末をこえて続くこと—などを使い、巧みに伏せている点です。『花伝書』の「秘すれば花」と同じ心です。

第1連最後の2行へと続きます。最終行の文頭 Still は副詞で、「これから先もなお、この後もずっと」。想像以上に長く続くというニュアンスがあります。「Tho'」は「though」の省略形。ここでは even though 「たとえ……とも」の意。through the world は「文字どおり」「世界中」「世界へまなび」。wander[wɪndə]「歩きまわる」。far and wide「遠く

くまた広く」。主語は *thy precepts* 「汝の教訓」です。複数形に注意。「汝」は同志社ですから、「同志社で学んだいろいろな教え」。動詞は *shall abide* 「生き続けることだろう」。散文的ではありますが、この4行の訳はこうなります。

親愛なる母校よ、同志社の学徒はぶどうの枝のごとく
つながりゆくであろう。

たとえわれわれが、世界くまなく、遠くまた広く、
さまよい歩こうとも、

同志社で学んだいろいろな教訓はわれわれの心の中に、
この後もずっと生き続けることだろう。

第2連の解説

We came to Doshisha to find

The broader culture of the mind;

We tarried here to learn anew

The value of a purpose true;

第2連の最初の4行です。ここで大切なのは、2行目、
The broader culture of the mind の *broader*
は形容詞の比較級で「より広い」。culture は *culture* 「文

化」と訳されていますが、ここでは「教養」。「より幅広い教養を求めて、われわれは同志社へきた」となります。同志社で、アーモスト大学などのリベラル・アーツ教育の伝統が受けつがれていることが、うたわれています。

tarried は *tarry* 「ふみとどまる」の過去形。anew は「もう一度、改めて」。第2連の前半の4行の訳は、次のようになります。

われわれが同志社にきたのは、
心のより広き糧を求めてだ。

われわれは、真の目的の価値を、
新たな意味において学ぼうとし、

ここにふみとどまっているのだ。
続いて第2連の後半をあげます。

Dear Alma Mater, ours the part

To face the future staunch of heart,

Since thou hast taught us with high aim to stand

For God, for Doshisha, and Native Land!

5行目の *ours the part* ですが、散文的にいいかえる *our part* is びす。語順を *is* を省いて、力強い文章とします。「われわれのつとめは、・・・である。」

9行目の *staunch of heart* も粋な表現です。staunch

は形容詞で「堅固な、ゆるぎない」という意味ですが、ここでは詩の中ですので詩的な慣例で副詞扱いをしています。「堅固に、ゆるぎなく」です。ofは状態を表わしtoに近いニュアンスで、strong in heartに似た副詞句になっています。「心は堅固に」とか「ゆるぎない心をもって」といった意味です。

7行目の hast は have の二人称単数の古語。だから thou hast は you have と同じ意味なのですが、ニュアンスが異なり、重厚で雅な学風の気配を感じさせています。7行目から8行目 stand For は「賛成の態度を示す、支持する、...のために立つ、役立つ、戦う」の意。

(付記)

作詩者ヴォーリスは、当時、同志社に来ていた3人のアーモスト大学出身者たちと親しくしていました。アーモスト大学の校歌「ジェフリー・アーモスト卿」の歌詞を教わっていたかどうか、わかりません。しかし可能性はあります。とこののは、校歌“Lord Jeffery Amherst”の最終行で stand for という熟語を同じように使っている。似たようなしめくり方をしているからです。

he's the noblest and the best,

To the end we will stand fast for him.

卿こそは最も高潔で最高位。われわれは、いつまでも、しっかり卿の志を称え続けよう。この stand for という熟語は、ヴォーリスが、同志社カレッジ・ソングの第3連でも使っています。また第4連では、may have stood for という未来完了の形で現れます。

第2連後半の訳をそえておきます。

親愛なる母校よ、われわれのつとめは、

堅き心をもって、未来に立ち向かうことである。

なぜなら同志社は、

神のため、同志社のため、また祖国のために

役に立てよと、高い目的をもって

われわれに教えてきたからである。

第3連の解説

第3連前半の4行です。

When war clouds bring their dark alarms,

Ten thousand patriots rush to arms,

But we would through long years of peace

Our Country's name and fame increase.

1行目の war clouds は「戦雲」。戦争のきやうのこと。alarms は「警報、警鐘」。2行目の arms は、通常、複数形の場合「武器、兵器」の意。この2行の大意は、「戦争のきざしが漂い、陰うつな警鐘がうち鳴らされるとき、多くの愛国者はすばやく武器を手にとろうとする」。

大切なのは、その次の3行目と4行目でしょう。「しかしわれわれは、長年の平和をとおして……」と続きます。

3行目の主語は we。動詞は would…increase「…を増やしたいと思う」。目的語は Our Country's name and fame「われわれの祖国の名声」。3、4行目の大意は、「しかしわれわれは、長年にわたる平和をとおして、祖国の名声を高めたいと思う」といったところでしょうか。

戦雲がその険悪な動向を示すとき、

いく千の愛国者は武器をもってはせ参ずる。

しかしわれわれは

久しきにわたる平和の年月のうちに

祖国の名と名声を

いやましにまじたいと思う。

第3連の後半部

Dear Alma Mater, sons of thine

Will hold their lives a trust divine.

Steadfast in purpose we will ever stand

For God, for Doshisha, and Native Land!

5行目から6行目の主語は sons of thine「同志社で学ぶ人たち、学んだ人たち」。動詞は will hold「考えを抱いてほしい、考えて学んでもらいたい」。will は指図に近い強い願望。their lives は目的語で「その生、その生涯」。a trust divine は目的補語。a は通常「ひとつ」の意味ですが、ここでは、抽象名詞を普通名詞化して可視化する用法。divine は「神の」。形容詞で前の trust にかかる。trust は「信頼、信託、ゆだねること」。ここでは "In God is our trust"（アメリカ国歌第4連）の "I trust in thee" (AV, Ps. 25:11「わたしはあなたに依り頼みます」詩篇第25篇2節）、"In God we trust"（アメリカのナショナル・モットーでドル紙幣やコインに書かれたり刻まれたりしている「我々はすべてを神に託す」）などと共鳴していると思われる。a trust divine「神を信頼すること」。

Steadfast は「確固とした、迷いのない、不動の」の意の形容詞。Steadfast in purpose は「スクール・グラマ―でいう「分詞構文」で、その前に Being を補うと分かりやすいです。「確固とした目的をもって」の意。

5～8行の大意は、「親愛なる母校よ。その生徒は、そ

の生涯とおし、神への信頼をもって、歩みゆくことだろう。確固不動の目的をもって、たえず、われわれは、神のため、同志社のため、また祖国のために、立とうとするものである」。

第4連の解説

Still broader than our land of birth,

We've learned the oneness of our Earth;

Still higher than self-love we find

The love and service of mankind.

文頭の Still は副詞ですが、うっごは接続詞の機能も兼ねさせられています。「やうに・・・とはいえ、・・・だけれども」。broader は「広い」の比較級「より広い」。意味上の主語は2行目の our Earth、動詞にあたるのは being ですが、ともに省かれています。1行目は、スクー・グラマーでいう「独立分詞構文」です。Our Earth being broader than our land of birth, 大意は「われわれの地球は、われわれの祖国より、さらに広いとはいえ」。

2行目 We've learned=We have learned. 現在完了形で「われわれは学んだ」。the oneness of our Earth「わ

れわれの地球（に住む人類）がひとつであること」。この句は聖書のことばをふまえています。

that we may be one. (AV, John, 17, xxi)

これみなひとつならんためなり。（ヨハネによる福音書17章21節）

この聖句は、ヴォーリズが大切にしていた YMCA の motto でもあります。ここでは、次の3から4行目の詩行で展開される人類愛の精神や国際主義を引き出すことばとして置かれています。

3行目から4行目にかけての文章の主語は we が、動詞は find が、目的語が the love and service of mankind です。3行目の文頭に置かれている Still higher than self-love は目的補語です。この Still higher は、1行目の Still broader と対句の形に整えられています。Still の意味はちがいます。3行目の Still は形容詞 higher にかかる副詞で、その意味は「なお、いっそう」。最初の4行の訳は次のようになります。

われわれが生まれた国よりも
さらに広い世界といえども、
それは一つであることを、われわれは学んだ。
自己愛よりもいや高き人類愛と奉仕の精神を

われわれは会得した。

第4連の後半部に移ります。最後の4行です。

Dear Alma Mater, sons of thine

Would strive to live the life divine;

That we may with increasing years have stood

For God, for Doshisha, and Brotherhood!

主語は sons of thine。動詞は Would strive 「努力したいと思ふ」。to live the life divine 「神にある生涯を送るよう」。

7行目の that 以下は副詞節。That...may.. は「・・・せんがために」。with increasing years 「重ねゆく年とともに」。

Stand for... は先ほども出ましたが「・・・に賛意を示す」。

のために立ちあがる「・・・のために戦ふ」。may have stood for は強い可能性を含めた未来完了形で、「・・・のために戦い尽くしたといえるために」。Brotherhood 「男女を含めた人類同胞たち」。ヴォーリズのことばでは「世界同胞」。

(付記)

Brotherhood は、ヴォーリズの強い思い入れのあることばです。「ワンパーパスの回顧」の中で、彼は次のように語っています。

三節までは、神のため、同志社のため、祖国のためと

歌ったが、最後の四節において世界同胞のためにとうたひました。廣い世界的な物の見方が同志社のためにはほしいとの念願からです。

世界同胞のためということは、皆がよく解っているのですが、なかなか実行がむづかしい。同志社の諸君こそその実行者であってほしいと思います。だから合唱するときは必ず四節もうたって下さい。(『同志社タイムス』1952年2月28日号、p.2)

近江兄弟社の英語名は Omi Brotherhood。ヴォーリズが書いた「近江兄弟社校歌」(Om Brotherhood School Song) の「原詩」は、

The life of peace and brotherhood

In love of neighbor and of God.

でしめくくられています。(『東と西の詩集』、本文 p.144、翻訳と注 p.115 参) 彼のいう「世界同胞」は、「愛」と「平和」につながる概念なのです。

近年の文学理論では、作品の客観的な「意味」と、作者の「意図」とは、一応わけて考えるのが一般的なのですが、(作者の「意図」や「心」を探る批評は、intentional fallacy—意図を重視する語謬—といわれています) しかし、作者の「思い」や「願い」は、まったく無視してよい

ものではないでしょう。このケースでは特に、ヴォーリズの「念願」は、充分あたたためて解釈に含める重みがあると思われまゝ。ただそのようなことは翻訳に入れかねますので、注釈として補足しました。

以下、第4連の最後の4行の訳を掲載します。

親愛なる母校よ、その学徒は

聖なる生涯を送らんがため、励もうとしている。

重ねゆく年とともに、

神のため、同志社のため、同胞のため、

かえりみて悔いながらんがために。

同志社のカレッジ・ソングは、この第4連で終わっていますが、改めて見なおすと、この歌詩全体の構成が、みごとに整っていることに気づきます。各連の前半4行では、同志社教育の基本―キリスト教主義、教養主義、平和主義、良心主義、国際主義―が語られます。そして後半の4行では、どの連も Dear Alma Mater で始まり、同志社の学生・生徒たちのあるべき理想的な生き方が示されています。

その上、またこの詩には、無駄なことばかりありません。隙のない強固な構造の中に、圧縮されたことばが埋めこまれています。つまり、形式そのものが意味をもっているの

です。「形式」が「内容」、つまり同志社の存在意義の、堅実・堅牢さを象徴的に表わしている、と思われまゝ。

あとがき

約10年前、2015年春のことでした。東京新島研究会の赤松龍会長（当時）にお招きいただき、同志社東京オフィスでの講演会に出かけたときのことです。私がカレッジ・ソングの日本語訳や解説をしたあと、この歌詩は詩としてすばらしい、といった話をしたことがありました。そのことを多田直彦さんが要約して『同志社ファン・レポート』に掲載され、さらにその話をもっと詳しく書いてほしい旨、氏から長年にわたりご依頼をいただいております。遅くなって申し訳ありません。おわび申し上げます。

その後本稿を書くにあたって、杉野徹氏、ご夫妻や村上みか氏にはいろいろご教示いただきました。また本井康博氏、押本年眞氏の解説も参考にさせていただきました。大鉢忠氏、辻友子氏からは、貴重な資料の提供をいただきました。厚く御礼申し上げます。